

編集後記

◇ 3月11日に発生した東日本大震災から100日が過ぎた。甚大な被害をもたらした巨大地震・津波に加えて、東京電力福島第一原子力発電所の事故は、その収束見通しも未だ定かでない。想像を絶する自然の破壊力のすさまじさには言いしれない無常観を感じる。また、原発事故では「科学技術」の光と影、とりわけリスク管理、リスク評価、リスクコミュニケーションの重要性を痛いほど思い知らされた。

私達は大自然の営みに対して、これまで以上に畏敬の念を抱き、謙虚な態度で向き合う必要がある。そして、原子力など「科学技術」の利用には、格段に高いレベルのリスク管理と評価が求められていることを深く認識しなければならない。今回の教訓と知恵を活かして、一日も早い被災地の復興を祈りたい。

◇ 財団法人いも類振興会の評議員会、理事会は5月27日に開催され、平成22年度の事業報告と決算について承認された。だが、平成22年度は外国為替レートが円高に推移したこともあり、本会にとっては大変厳しい内容の決算となった。

また、2年毎の理事、監事、評議員の改選も行われた。就任者の約5割が新任であり、大幅な若返り人事となった。今回選任された本会の理事、監事、評議員の名簿は、「お知らせ」欄に掲載したとおりである。

◇ 本誌No.108の特集では、「ジャガイモ貯蔵技術の現状と課題」を取りあげた。かつて究極の貯蔵技術と言われていたコバルト60照射によるジャガイモの発芽防止技術は、1973（昭和48）年度農林省予算の農産物放射線照射利用実験事業により、北海道の士幌農協で実用化された。この事業は、当時の太田寛一ホクレン会長（士幌農協組合長）らの強い要望などもあって実現したものだ。その時、私は農林省畑作振興課で、この事業化の企画立案・予算作成を担当していた。あれから38年が経過した。この間、コバルト60照射によるジャガイモ発芽防止技術の利用は、周知のとおり紆余曲折の厳しい道を辿る。そして現在、ジャガイモ貯蔵に関する試験研究や実用化技術がどの段階にあり、それぞれの技術がどのような課題を抱えているのか、その全体像を明らかにし今後におけるジャガイモ貯蔵技術の改善につなげたい。これが本特集テーマ設定の主たる背景と動機である。

執筆は、北海道在住の研究関係の方々をお願いした。本特集が、ジャガイモ貯蔵技術の更なる研究開発・利用の促進に結びついていくことを願っている。

◇ 先崎千尋氏に連載をお願いした「干しいものルーツをたどる」は、今回をもって終了した。この寄稿の土台となった先崎千尋著「ほしいも百年百話」(2010年3月、茨城新聞社発行)は、2010年12月には改訂を重ねている。長く埋もれていた干しいも100年の歴史に、光を当てた先崎氏の功績は大きい。

◇ 海外情報では(社)北海道農業機械工業会の原令幸氏に、海外調査を踏まえて「ドイツ、オランダのジャガイモの現状と課題」について、貴重な報告をいただいた。特に、種ばれいしょ、機械化技術等に関する情報は、今後、わが国におけるジャガイモの栽培、経営の改善に活かしていただきたいものだ。

(狩谷 昭男)